

---

# 力を求めし者

interu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

力を求めし者

### 【Nコード】

N2698U

### 【作者名】

interu

### 【あらすじ】

少年は悟った。

力がなければなにもできない、力がなければなにも守れない、力がなければなにも救うことなどできない、力が、力がなければ……。

そして少年は狂った。

明るく、無邪気な性格も、冷たく、物静かな性格になり、ほとんど笑わなくなった。

少年は誰かを守るために、力を欲した。そして少年は世界唯一の男

性としてのIS操縦者となり力を手に入れていく。  
これは切なくも温かい、ある少年の物語。

## キャラ設定(前書き)

衝動で書いたかもしれません

## キャラ設定

### 織斑一夏

ある日の事件により明るかった性格が途端に冷淡で物静かな性格になってしまった。

それ以来誰かを守る力を欲し続けている。

生身ではかなり強く、本気の千冬と互角かそれ以上の実力をもつ。

ISのほうでも実力、適正ともに高く、楯無と互角の実力もち、適正はS。

普段は相手に対して冷たく接しているが、根はもの凄く優しい。

その時々みせる優しさや、クールな対応などもあって、多くの好意をよせられる。

本人いわく、恋愛には興味がないらしいが、本当は美麗のことが気になっている。

なんでも1人で背負い込むため、まわりに頼ろうとは一切しない。

また女尊男卑の風潮をかなり嫌っており、偉そうにする女は大嫌いである。

とにかく守ることに強い憧れのようなものを抱いており、誰かが自分のせいで傷つくと、

怒り狂い、暴走してしまう。

これを止められるのは美麗と千冬のみで、他の人間がいうことなどは耳に入らない。

### 桜木美麗

一夏のファースト幼馴染で、明るい性格だった一夏、冷淡な性格の

一夏の2つの一夏を知っている。

そして事件のことも知っており、1人で背負い込もうとする一夏を心配している。

幼いころから一夏に好意を抱いており、今の一夏を救ってあげたいと心から思っていたり、誰よりも一夏の事を好いている。

そのため、一夏をバカにするものや、一夏に負担をかける者は大嫌い。

千冬と同じくらい一夏の事を理解している。

けれど、一夏を知ったようにふるまっている筈や鈴のことはあまりよく思っていない。

また、一夏が千冬と同じくらい信頼している数少ない人物。

ISの技術はかなり高いが、代表候補生ではない。

しかし、セシリアくらいなら訓練機でも倒せる。一夏には手も足もでない。

容姿はかなりの美少女で、髪型はきれいな黒髪のロングヘア。

スタイルも抜群によく、笑顔もかなりかわいい。

そのため時々一夏をドキッとさせている。

## キャラ設定（後書き）

なんかこんな感じの書きたいな、と思って書いてしまいました。  
だけど更新はかなり鈍足かもしれません。

## ISと再会と（前書き）

この作品では、一夏の1人称は「僕」です。



## ISと再会と

ある日、僕は悟った。

力がなければなにもできない。

力がなければなにも救えない。

力がなければなにも守れない。

そして僕は力を求めた。

全てを守ることでできる最強の力を……。

「で、どうしてこうなった？」

僕が今いるのはIS学園。

IS学園とはインフィニットストラトス、通称IS操縦者を育成する特殊国立高等学校で、

ISに関連する人材はほぼこの学園で育成されている。

ISとは宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツのことで、

今じゃスポーツとして定着している。

しかし、このISには1つ欠点がある。それは……、

男には使えない

そう、ISは女性にしか使うことはできないのだ。

僕もISは使えない……はずだった。

僕はISを動かしてしまったのだ。

そして唯一ISを使える男としてこのIS学園に半強制的に入学した。

しかし、ISは現在世界最強の兵器だ。

僕の求めているのは最強の力。

あのような惨劇が2度とおこらないように、

誰かが傷つくことのないように、僕は決意した。

最強になると……。

「みなさん揃ってますねー。それじゃあS H Rを始めますよー！」

黒板の前でにっこりと微笑む山田麻耶先生。

ぼくのクラスの副担任だ。

正直、先生にはあまり見えない。

身長もやや低めで、生徒と見間違えるくらいだ。

服のサイズはあってなくて、かけている眼鏡も若干ずれている。

「それではみなさん、1年間よろしくお願いしますね」

「.....」

しかし変な緊張感に包まれているせいか、誰も反応しない。

「じゃ、じゃあ自己紹介お願いします。出席番号順で.....」

涙目でうるたえる山田先生。

少しかわいそうになるが反応が出来ないのは僕も同じことだ。

自己紹介がだんだんと僕の番にせまっていき、僕の番になった。

まわりを見るとみんなこっちにすごい注目している。

しかし、僕は気にしない。気にしてなんかいられない。

「僕は織斑一夏。知ってると思うけど唯一ISをつかえる男としてここにやってきた。好きなことは特にない。嫌いなことは何も守れ

ないこと。男ということに気になるかもしれないけど、あまり僕に接しないでほしい。僕と関わるといいことは絶対ないから。とりあえずこれからよろしく」

刹那、教室が冷たいオーラで満たされた。

当たり前だ、こんな自己紹介じゃそうなるに決まっている。

しかし、接してほしくない、関わってほしくないというのは本音だ。僕が心を開いている人以外とはあまり話したくない。

まあ、心を開いている人なんて5人もいないくらいだけど……。

そこで突然、上から何かが来るような気がして、とっさに腕を上げる。

バンッ

鈍い音が響いた。腕に少しの痛みがはしった。

「お前はもう少しまともな紹介はできんのか？」

「それは姉さんならわかるでしょ？」

そこには僕の実の姉、織斑千冬がいた。

この人は偉大だ。

ISの世界大会、モンド・グロツソで優勝し、絶大な人気を誇っている、

まさに世界最強の人間である。

また、あいつと同じくらい僕のことを理解してくれる

僕が心を開いた数少ない人間の1人でもあつて、とても尊敬している。

「ふんつ。それと学校では織斑先生だ。」

「わかりましたよ、織斑先生」

「私の紹介はあとでいいから続ける」

そして自己紹介は進んでいく。

僕としてはどうでもいいことだったけど、一応顔と名前は覚える」とにした。

「桜木美麗です」

「っ!」

しかし、今自己紹介している人は顔も名前も知っている、  
というか忘れられない人だった。

僕は反射的に自分の席を立っていた。

「美麗……………」

「久しぶり、一夏……………」

こうして僕は幼馴染でありながら、姉さんと同じくらい僕の事を知っている、

桜木美麗と再会した。



## ISと再会と（後書き）

基本的に一夏は心を開いた人には普段でも優しいです。

ちなみに一夏が完璧に心を開いているのは、美麗と千冬だけです。

鈴や篝にはほとんど心を開いていません。

## 桜木美麗という存在

僕は今、幼馴染の美麗と再会して、思わず席を立ってしまったのだが、かなり注目されていることに気づき、僕は席に座る。

桜木 美麗

僕が2歳のころに出会った幼馴染であり、僕が心を開いた数少ない人。  
僕の事を理解してくれて、いつでも僕の支えとなってくれた大事な人。

そして……あのことを知っている人。

桜木美麗は僕の全てを知っている。

しかし、僕は悪い気はしない。むしろ、とても感謝している。

僕のことをいつも励ましてくれて、支えてくれて、一緒に泣いてくれて……。

僕はそんな彼女のことが……。

とにかく、桜木美麗は僕の大切な存在であって、僕が絶対に守らなければいけない存在でもある。

1年ほど前に別れてしまったが、今ようやく会えた。

僕の……好きな人に。

このあと姉さんの紹介があったりして、SHRは終わった。しかし、あまり頭には入っていない。



美麗との再会で頭がいつぱいだったからだ。

S H Rが終わると俺はすぐに美麗の所に向かった。

「美麗……とりあえず屋上に行こうか」

「……うん」

僕は美麗の手を取る。

興味深々で僕をみている人たちや、厳しい視線で僕をみている人を無視して、

僕たちは屋上へと向かった。

「とりあえず……久しぶり。またあえてうれしいよ」

「うん……私も」

屋上についた僕たちはとりあえず再会のあいさつを交わす。

「一夏……最初に聞くけど、まだあのことを？」

「……ごめん。あのことはどうにも僕の頭から取れないみたいだ」

そう、あのことは絶対に忘れられない。

なにがあっても、僕の頭からははなれない。

「そっか……」

少し暗い顔をする美麗。

「でも……しかたないよね」

無理やり笑顔をつくる美麗にすこし胸が苦しくなった。

僕はまだ美麗にこんな顔をさせなきゃいけないのか……。

「それと一夏」

「なに？」

「なんで一夏はISを動かしちゃったの？」

「あ……それは」

これからはけっこう信じられない話なんだよな……。  
僕は首にかけてある、黒いネックレスを見る。

「これから話すことは信じられないかもしれないけど聞いてくれよ？」

「うん……」

「あれは中3の冬だったな。そのときはとにかく力が欲しくて欲しくてたまらなかった。」

そんな僕も受験を受けなきゃならないから会場に向かってただ、向かう途中にどうも足が違う方向に進んで……

気づいたら、全く人がいないところにいたんだ。

あときは少しだけ混乱したよ。それからだ。

僕が戻ろうとしたとき、僕の目の前にこいつが現れたんだ」

そういつて僕は美麗に黒いネックレスを見せる。

「すると勝手に体が動いてさ、気付いたらこいつに触れてた。

そしたらいきなり起動しちまったてわけなんだ。

信じられないだろうけどこれは事実なんだ。」

本当に信じられない話だ。

男がISを動かしただけで不可解なことだし、

目の前にいきなりISが現れたとなるとさらにわけがわからない。まあこんな話信じるのは姉さんと美麗くらいだと思っけど……。

「美麗……信じてくれるか？」

「うん。私は一夏が言うことならなんだって信じる」

「そうか……ありがとう」

「これから一夏はどうするの？」

これから、か……。僕には少し目標があるんだ。  
大きい、大きい、野望のようなものが……。それは、

「ISで最強になる。それだけだ」

一夏の専用機 設定（7月21日更新）（前書き）

分かりにくかったらすみません。  
というかなりわかりづらいです。

## 一夏の専用機 設定（7月21日更新）

IS・・・メルゼス暴王

操縦者・・・織斑一夏

開発者・・・？

世代・・・？

ある日、いきなり一夏の目の前にあらわれたナゾのIS。  
機体カラーは黒一色に染まっている。

機体そのものはアニメの白式のような感じで、  
この暴王はそれに、銀の福音シルバリオ・ユスベルの羽のようなものをたしたものの。  
そのため、細かい動きが可能になり、機動性はかなり高い。  
スペックは紅椿より少し下。  
だが、一夏自身の能力がかなり高いため、実際の所、紅椿より、速い。

### 【冥府神の刃】オシリス・ブラッド

暴王のメインウェポン。

全長4メートルほどの長剣で、一夏が好んで使う。  
威力はそれなりに高く、ただの近接ブレードより全然高い。  
ちなみにカラーは黒。

エレボス・ビストレット  
【暗黒神の銃】

エネルギー弾を放つショットガン。

威力は「冥府神の刃」と同じく、かなり高い。

大体、シャルの「レイン・オブ・サタデー」の3倍ほど。

さらに長く連射をすることができ、遠距離でもエネルギー弾は相手に届く。

カラーは黒。

シヴァ・サイス  
【破壊神の鎌】

一夏がたまに使う大鎌。

これもカラーが黒のため、これを使っている一夏は悪魔のように見える。

鎌、ということ慣れていない相手を翻弄させ、

じわじわとシールドエネルギーを減らしていく、というのが一夏の戦法。

上に書いた通り、本当に悪魔のようである。

メルビス・ドア  
【暴王の月】

暴王の単一仕様能力。

発動すると直径が2メートルほどの漆黒の球体が現れる。

暴王の月はあらゆる形に変化することができ、応用系として様々なものになる。

また、武器に纏わせることもできる。

暴王の月を纏った武器は零落白夜並の攻撃力を誇る。

暴王の月自体で攻撃することもでき、その攻撃を受けると、シールドエネルギーを突破し、絶対防御を発動させるほどの威力があり、

その攻撃力はすべてのISのなかでダントツ。

しかし、零落白夜同様に、シールドエネルギーは必要とする。

だが、使用するエネルギーは比較的少ない。

また、相手のあらゆる攻撃を無効にすることができ、AICも例外ではない。

暴王の月は何故か、一夏が生身のときも使用することができ、  
実質、一夏は暴王を使わずともIS戦闘において勝利することができる。

デミリットとしては、生身で暴王の月を使うと激しい頭痛に見舞われる。

一夏は、この能力をよくは思っておらず、生身の時はほとんど暴王の月を使用しない。

また、このことを知っている人物は少なく、5人にも満たない。





## 金髪と悩む者（前書き）

更新遅れました。

今回はセシリアと箒さんの今後、空気になってしまいそうな方たちの初登場です。

それとサブタイトルおかしくてすみません。

## 金髪と悩む者

美麗と話した後は普通に授業を受けた。

最近まではISの知識は皆無だったが、参考書を全部覚えたせいか、なんなく授業の内容を理解することができた。

しかし、それは他の生徒も同じことだったので、やっぱりレベルは高いのだと

改めて思い、今はこれから備えて教科書を暗記中。

教室の外からも、ざわざわと生徒たちが話しているが無視して僕は表情一つ変えずに無表情のまま教科書の暗記に集中する。

「ちよつとよろしくて?」

いきなりかけられた声に少し驚きつつも僕は声がする方向に目を向ける。

そこにはこちらを見下したような目で見て、金髪碧眼の生徒がいた。

僕は再び教科書に目を向ける。

「ちよつと、聞いてますの!??」

すこし声を荒げている金髪を僕はまたもや無視する。  
理由は簡単だ。

僕はこの女が気に入らない

そう、気に入らないのだ。

人を、正確に言つと男を見下すようなこの目。  
偉そうな態度。

こういう女は必ず女尊男卑の影響を受けまくっている。  
そして男を人としてとらえてなく、ただの道具だと思つていやがる。

そんな女に反応する義務などない。

故に僕はこの金髪に反応を示さないのだ。

しかし………、

「あなたいい加減に……『うるさい、少し黙れ』なっ……！  
？」

僕はしつこく言ってくる金髪がうざくなり、つい反応してしまった。

「僕が自己紹介の時言っていたことを忘れたの？」

あまり接しないのでほしいって言ったよね。

それに君みたいな女が僕にきやすく話しかけていいと思ってるの？

今度話しかけてきたら本当に半殺しにするよ。

半殺しにされなくなかったら、さっさと席に戻りな。」

「なっ………!？」

驚きながらも金髪は複雑な表情を浮かべながら席へと戻って行った。  
そして僕を見に来ていたと思われる教室の外でざわざわしている生徒達も、

今の会話を聞いていたらしく、すうーと自分の教室へと戻って行った。

今回は少し目立ってしまったみたいだ。

## 箒の視点

（あれは本当に一夏なのか？）

私は一夏の自己紹介を聞いて以来、このようなことを思っていた。最初、一夏がIS学園にくると知った時はうれしかった。

本当にうれしかった。

だけど、6年ぶりに会った一夏は6年前とは違っていた。

昔のような無邪気さは感じられず、まるで昔とは真逆だった。

私の知らない一夏がそこにはいた。

私は一夏の幼馴染だ。

小さいころは頻繁とまではいかないものの、たまに一緒に遊んでいた。

剣道もやったし、たくさん話したりもした。

だから千冬さんの次くらいに私が一夏のことを知っていると思った。今でもそう思っている。

だけど、なんであんなってしまったのかは全く分からない。

6年間の間になにがあったのか。

これを聞こうとして、休み時間に一夏の方へと向かおうとした。

しかし、一夏が最初に向かったのは……見知らぬ女子だった。

結局、私は足が止まってしまい、一夏を睨むことしかできなかった……。

だけど次の休み時間に聞くことを心に決め、私は授業を受けた。

大丈夫。

一夏は私を嫌がったりなんかしない。

そして全ての真相も教えてくれる。

なんであんな性格になってしまったのか、あの女子は誰かということ……。

## 金髪と悩む者（後書き）

更新が遅れました。

中体連で忙しかったり、先輩の家に泊まったりで、パソコンが構え  
なかつたです。

すみませんでした。

## 記憶喪失と忘れた幼馴染

「ちょっといいか？」

授業を終えて、美麗といっしょに昼食を食べに行こうとした僕は、『どこかであったことのあるような女子』に話しかけられていた。

「ごめんよ、僕はいまから食堂に行くんだ。

君みたいな人と話している暇なんてないし、

第一、僕に気安く話しかける事じたい嫌だから。

そういうわけで、今後も話しかけないようにね。頼むよ」

僕は思いっきり本音を言っつてその場を去ろうとした。

「い、一夏！お前、私を忘れたのか！？」

その女子は肩を震わせながら大声で叫んできた。

ていつか忘れたもなにも、僕この女子とあったことなんて……。

そうか、この子は僕が記憶を失う前にあっていたのか。

僕はあの事件の前の事はほとんど覚えていない。

あの事件は確か僕が中1のころだから、その前にこの女子は、僕と会っていたのだろう。

「僕は君の事は覚えていないよ。

あったことがあるとは思うけど、ごめんよ。

僕は一回記憶喪失してさ。



君の事なんてこれっぽちも覚えていないんだよね」

「なっ……!!」

その女子は驚きを隠せない様子で、それが表情に出ていた。

「わ、私は篠ノ之箒だ！本当に覚えていないのか!？」

「うん、全然」

箒は落ち込んだ様子でその場にへたへたと膝から崩れてった。

「君を忘れたことは悪いと思ってるよ。」

「だけど、君の知っている僕はもういないから。」

「これからはただのクラスメートの関係で、昔の関係は捨てよう。君が知り合いだった織斑一夏はそのころの織斑一夏であって、今の織斑一夏とは、何の関係もないんだよ。」

「その……本当にごめんね。」

「これからは気安く話しかけないこと。分かった?」

「な、なにを……!!?」

「じゃあね」

僕はまた去ろうとする。

「ちょ、ちよっと待ってくれ!」

「だけど箒が僕をまた呼び止めた。」

「なに？」

僕は少し苛立ちながらも立ち止った。

「1つ聞かせてくれ。どうしてそうなってしまったのだ？」

「君には……関係ない」

「じゃあもう1つ。あの女子は誰だ？」

あの女子……美麗の事か。

これくらいなら……言ってもいいかな。

この子には少しきついことを言ってしまうているからね。

ちよっとしたお詫びで……。

「美麗は僕の1番の理解者であって、僕が1番守らないといけない存在。」

僕をずっと支えてくれてる、僕の……1番大切な人だよ」

僕はちよっと恥ずかしいことを言って、その場を去って行った。

## 同居者はセカンド幼馴染？（前書き）

遅くなりました。

でも更新の速さはこれからもこの調子だと思います。

ちなみにセカンド幼馴染は鈴ではありません。

## 同居者はセカンド幼馴染？

### 第side

(一夏が私の事を忘れただど！?)

一夏と別れた後篇は1人、落胆していた。  
昔からずっと思っていた一夏に『覚えていない』と言われたことは  
第にとつて、

言葉では言い表せないほどショックだったのだ。

記憶喪失はしようがない。

これは人の意志なんか関係なく、ただ記憶が消えるのだから。  
しかし、それでも一夏は少しなら自分の事を覚えている。  
そう思いたかった。

だけど、それはただの甘い幻想であつて、厳しい現実ではなかった。

一夏は微塵も自分の事を覚えていなかった。

この厳しい現実にはただ立ち尽くすことしかできなかった。

なぜそうなったかの理由を聞こうとしても一夏は全く話してくれな  
かった。

悲しかった。ただ悲しかった。

一夏が自分の事なんてちつとも覚えてなく、今では少しも気にか  
けてない。

そう思ってしまう。

しかし、あの時の一夏の目は決して醜いものを見る目ではなかった

と感じた。

いや、そう感じたい。

一夏は私を忘れてしまっているけど、気にはかけてくれる。  
そう思うとだいぶ気持ちになるのだ。

だから、私はあえてこのことは忘れた。

これからまた新しい一夏との関係を作っていこうと、そう決意した  
から。

この時はあの美麗とかいう一夏の知り合いのことなんか忘れて、  
私はこれからのために自分の決意をより固めていた。

一夏 side

今、僕は自分の家に帰ろうとしている。

IS学園は全寮制なのだが、部屋割りはまだ決まっていらないらしい。故に僕は一週間ほど自宅からの登校である。僕としてはそれほど苦ではない。

むしろあんな女子だらけのところにいるよりはるかに落ち着く、自宅の方が僕としては楽だ。

そう思い僕は歩き出した。しかしそこへ……。

「織斑君、少しいいですか？」

「はい、なんででしょう？」

山田先生がやってきた。

僕に用事みたいだが……IS関係の事か？

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「……はい？」

でも確か僕の部屋は決まっていはずじゃ……。

「事情が事情だからな。無理やり部屋割りを変更した」

この声……千冬姉か。

このとき僕の頭の中で、ダースベイダーのテーマが流れた気がした。

「一応聞いときますけど、個室ですか？」

個室じゃないと精神が持たない気がしてやばいのだが……。

「そんなわけないだろう、馬鹿者」

ですよー！。

「お前の部屋は3人部屋だ。同居者は……まあ2人ともよく知ってるやつだ。」

それとそのうちの1人は2年生だからな。

あいつはお前が入学したと聞いて真つ先に部屋の事を私に言いに来た。

大体予想はつくと思うがあいつだ。

疲労がたまると思うが、もう1人はましな奴だから安心しろ」

「あいつと一緒にだと夜も眠れないと思うんですけど……」

あいつの正体はもう理解できている。

小さいころ、まあ美麗とあった1年後くらいに初めて出会い、あの事件の事や、俺の事を美麗とまではいれないが、ほとんど知っている。

僕が心を開いた数少ない人物の1人で、美麗と同じような関係にある。

セカンド幼馴染といったところだ。

ここまでではいい。ここまでではいいのだが……1つ問題がある。それは……あいつは人目も気にせず俺に抱きついたりしてくることだ。

もちろん恥ずかしいし、周囲の視線がとてつらい。

しかも出会うごとくにしてくるものだから大変だ。

昔もあいつの家に泊まった時も、夜に俺の布団に入り込んで来たり、風呂に入っていると、一糸まとわぬ姿で入ってきて、結局一緒に入浴したり……。

とにかく大変なのだ。

僕は荷物は千冬姉がもってきたということを確認して、渋々、寮へと向かうのだった。

ちなみに、もう1人の同居者は美麗である。



## 同居者はセカンド幼馴染？（後書き）

少し設定変えました。すみません。

一夏の言う『あいつ』は、分かりましたでしょうか？

僕はその人が好きなので無理やり登場させようと思ったところになりました。

## 予想通りなセカンド幼馴染

僕は今、1年生の寮にいる。

流石というべきか、そこらのホテルよりも高級そうな感じがしていることに

驚きつつ、僕は自分の部屋に向かった。

途中、他の生徒と会うたびに好奇の視線を向けられたが僕が振り向くと、

その者達はそそくさにその場を去って行き、また、1組の生徒は僕を見ようとせず、

避けるようにすれ違った。

あの自己紹介がずいぶんと印象的だったようだ。

しかし僕は気にせず、少し早足で部屋に向かった。

とりあえず、部屋の前には到着した。同居者は2人、もちろん女子だ。

そして、2人とも僕はよく知っている。

1人は美麗で間違いはないだろう。千冬姉のことだし……。

問題はもう1人の方。

一応幼馴染だからあいつの行動は大体予想できる。

どうせ、僕が部屋に入った途端、裸で抱きついてくるか、キスしてくるかだ。

小さいときにもよくあった。

そのおかげで、僕のファーストキスはあいつになってしまったのだが、

この話は置いて……いや、捨てておこう。

まあ、自分で言うのもあれだが僕はあいつに好意を持たれてしまっているらしい。

こんなこと、原作の僕以外の男なら誰だってわかるだろう。

某上条○麻でもわかる。

僕としては喜んでいいのか、喜ばなくていいのか、というところなのだが、

あつちはかなり深いところまで行ってしまったらしく、キスやハグなんてものは日常茶飯事になってしまった。

はっきり言って鬱陶しい。

今すぐにもやめてもらいたい。

しかし、現実つてもんは意外と厳しく、やめてもらうなんてことは最早、非科学的と言っても過言ではなくなってしまった。

つまりだ。

自己紹介であんなことをぶちかました僕が、裸の女子に抱きつかれているところを、

他の生徒が見たらどう思うだろうか？

絶対にいいイメージは持たれないだろう。

そうなると、僕はこの学園での悪夢の3年間を過ごさなくてはいけなくなる。

それだけは絶対に避けたいから、僕はドアを開けるタイミングを、計らなければならない。

それが、とびかかってくるあいつをかわすか、だ。

はっきりいつてかわす自信はあまりない。

あいつはあれでも、化物と呼ばれるほどの天才だ。

僕ほどではないが、身体能力もかなり高い。

そんなあいつを、100%かわす自信なんてどこにもない。

あいつ、神出鬼没だし……。

しかし、ドアを開けるタイミングを計るのも難しい。

できないことはないが、こちらとて100%成功するわけでもない。

どっちのやり方でこの、ある意味、危機的状况を回避しようか僕は30秒ほど考えた。

で、考えた結果、あいつをよけることにした。

理由は特にないが、こっちの方が自分に合っているような感じがしたからだ。

少し、覚悟を決めて僕は部屋のドアを開けた。

「いーちーかー!!」

案の定、ドアを開けた瞬間、あいつがとびかかってきた。(裸で)動きが面白いくらいに予想通りだったので意外とかわすことは楽だった。

「一夏、いきなりかわすなんてひどいよ」

「あんたもいきなりとびかかってくるなよ。いい加減直らないのか、それ」

「一夏が私になびいてくれるまで直らないよ!」

「たつく……まあ、久しぶりだな、楯無」

「うん、久しぶり……一夏」

こうして僕は、セカンド幼馴染の更識楯無と再会した。

## 予想通りなセカンド幼馴染（後書き）

すみません！

自分でも予想はしてましたが、更新が遅くなりました。  
これからもこんな調子です、多分。

## 幼馴染との朝（前書き）

すみません。かれこれ一ヶ月以上も放置してました。

## 幼馴染との朝

「本当、驚いちゃったよ」

「僕の方が驚いた」

あのあと少し、楯無を説教して（何故か嬉しそうだったが……）今は談笑中。

……やっぱり美麗や楯無と話すのは楽しいな。

「あ、一夏。美麗から聞いたんだけど今日、あのセシリアちゃんと口論したの？」

「ん？ああ、ちょっとむかついたからな」

「……一夏ってすぐにああなっちゃうよね」

美麗が苦笑交じりにつぶやく。

「しょうがないだろ、あれは流石にキレそうだったし……」

「一夏らしいっていえば一夏らしいけど……」

楯無にも苦笑された……。

こいつに苦笑なんかされると悔しいのは気のせいか？

「さ、そろそろ時間だから早く寝ましよう」



「そうだな」

「うん」

楯無の意見で各々自分のベッドに寝転んだ。

ベッドに入った途端、急に眠気が襲ってきた。

・・・今日はいつも以上に疲れたのだろう。

そして僕は襲い掛かってくる眠気に身をゆだねて、意識を手放した。

翌朝

えつと・・・少し状況を整理しよう。

なんで、僕のベッドに美麗&楯無が全裸で寝ているのだろう・・・

・・・。

僕は変なイベントを起こした記憶は皆無なのだが・・・。

いや、まてまて。なにパニックっているんだ僕は。

どうせまた楯無の仕業だ、うん。

美麗はただ巻き込まれたただけだ、そうに違いない。

僕はこの状況から脱するためにとりあえずベッドから出ようとする。

しかし、二人に両手をつかまれていて身動きが・・・。

それに、二人とも体が僕に密着してるため、その・・・なんだ。

二人の柔らかなあれが惜しみもなく僕に当たっているためいろいろとやばい。

「う・・・むにゃあ。あ、一夏おはよう」

「あ、ああ、おはよう」

美麗が起きてしまった・・・。

それに寝ぼけているのか今の状況が理解できていない様子。

「ん？なんで一夏と一緒のベッドに……って、なんで裸!？」

やっとで今の状況が理解できた美麗は驚きの声を漏らす。

「い、一夏!そ、その……私と一夏って昨日、したっけ？」

「いやしてない!なんのことが知らんがなにもしてない!してない  
つたらしてない!」

変な誤解をしてる美麗を全力で否定。

このあと美麗の誤解をといたあと、起きたての楯無に説教をし、  
お詫びと称して楯無が即急に作った朝食を食べて、  
3人で登校したのだった。

## 幼馴染との朝（後書き）

前書きにもありましたが本当にすみません。

しかし投稿してなかった間に、体育祭やテストが片付きました。

テストの結果は、まあ普通でした。

よくもなく悪くもなくってところです。

これからはもう少し頻繁、までとはいかないけど、

週一くらいで更新できたらと思います。

相川さん、ほんと勘弁してください(前書き)

いや、ほんといろいろすみません・・・。

相川さん、ほんと勘弁してください

IS学園生活二日目

昨日はどうもほかの生徒に寄り付かなかったが、今日は違った・  
・。。

「す、好きな食べ物はなんですか!？」

「好きな女の子のタイプは!？」

「スリーサイズは!？」

「お風呂どこから洗うの!？」

なんだこれ・。。。。

なんで僕はこんなにも女子に囲まれているのだろう。  
しかも怒涛の質問攻め。

最後の二つなんてセクハラじゃないか・。。。  
質問した方も顔真っ赤だし。

「えっと・。。。。、逆に質問するけど、なんで僕はこんなことにな  
ってるの？」

君たち、僕が怖くないの?そして最後の二つの質問はなんなの?  
答えてくれたら最初の二つの質問だけ答えてあげるから」

「最後の二つの質問も答えてくれたら教えてあげる」

「……………いよいよ」

「やった！」

なんですかこの羞恥プレイは……………。

相川さん（だったけ？）、頼むから満面の笑みで僕をいじめないでくれ……………。

「じゃあ、教えてあげる。ちゃんと聞いてね」

「……………」

僕は嫌々ながら無言でうなずく。

「えっと……………織斑先生に聞いたんだけど……………。

織斑君って、実はすごいわゆるツンデレじゃ！」

「え……………」

「織斑先生が……………」

『あいつはあんなことを言っておいて根は意外と優しいんだぞ。

まあ……………いわゆるツンデレってものだな。

だからあまり怖がらなくていいぞ。これからは普通に接してやってくれ』だって」

「千冬姉、余計なことを……………って、僕はツンデレじゃない！」

「さあ、教えてあげたから、今度は織斑君の番だよ」

「……………答えてあげたいけど、今は無理だよ」

「……………えっ?」「……………」

「後ろ、見てくらん」

僕の言葉の意味に気がついたのか、彼女たちは恐る恐る後ろに目を向けた。

「授業が始まっているのにも関わらず、いい度胸だな」

「……………お、織斑先生……………」

このあと彼女たちは出席簿アタックをくらい、涙目になって、自分の席へと戻っていった。

まあ、今までほとんど人を避けてきた僕にとって、今回のことは少し心が和らいだ気がした。

(あとで千冬姉にお礼言っておこうかな……………)



「さて、授業を始める前に決めなければいけないことがある。クラスの代表者だ」

唐突に千冬姉がこんな発言をした。

「クラス代表とは……まあそのままの意味だ。再来週に行われるクラス対抗戦への出場、生徒会の開く委員会への出席……簡単ないえばクラス長みたいなものだな。ちなみに、一度決まると一年間変更は一切無いからそのつもりで」

話しだけ聞いてたらかなりめんどくさそうなのが伝わってくるな。僕はそういうのは一切合切お断りだ。

……しかし、なんだ。

このただならぬ嫌な予感……。

「はい、私は織斑君を推薦します！」

「はっ!?!」

思わず素の声が出てしまった。

「私も織斑君がいいと思います！」

「私も！」

相川さん、岸本さん、田島さん……。

君たちはノリノリの顔で何言ってるんですか……。

そして僕はなぜ既視感デジャヴを感じているだ……。

「候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

千冬姉の発言に誰一人、答えようとしなない。

流石に僕はこの空気で「やりたくないです」といえるような人間ではない。

「お待ちください!?!」

僕が諦めかけたときに声を荒らげて席を立ったのは……。

「「」のようなことは認めませんわー!」

セシリア・オルコットだった……。

相川さん、ほんと勘弁してください（後書き）

え〜と・・・すみません。

週一で更新するとか言いながら結局二週間ほど経っていました。

しかもなんだ今回のサブタイトル・・・。

自分でやっておいてなんですけどもう意味わかんないですね。

## 金髪碧眼の美少女は偉そうな奴が多い

「男がクラス代表！？ありえせんわ！なぜ極東の猿などに、クラス代表など？」

「いい恥さらしですわ！一年間、わたくしに屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？」

いきなり声を荒らげて、なにを言い出すのかと思うと、このことかよ……。

どうやらこいつは、女尊男卑というあの風潮に心底はまっぴららしい。

「大体、なぜ実力も力も知識もない男などにクラス代表な……ど……？」

セシリアは途中で、声が途切れてしまった。

それは……、一夏から放たれている殺気に怯えたからだっ  
た。

「……どいつもこいつも女尊男卑ばかり気にしやっがって。

なにが男だからクラス代表には相応しくない、だ……。

そんなもん、理由になつてねーんだよ、セシリア・オルコット」

セシリアだけではない。

美麗、千冬以外の生徒は恐怖を露にしており、肩がふるえているも

のもいた。

しかし一夏は続ける。

心配そうな、しかしどこか悲しそうな美麗には目もくれずに……。

「女尊男卑がなんだってんだ。

オルコット、お前が言っていることは、風潮に流されたバカの言う意見だ。

元々、女尊男卑なんてあってはならないことぐらいお前、いやお前らはわからないのか？

この風潮のせいで社会的地位を奪われ、苦しい生活をしている男なんて、

数えられないほどいるし、命を落とした（……）人だっているんだよ。

それをわかっててなおも女尊男卑を肯定するような言動をするお前はなに様のつもりだ？」

「っ！……そ、それは……」

正論を言われ、セシリアは言い返すことができない。

「し、しかしクラス代表は力がなければ務まりませんわ。

あなたは操縦時間が3時間にも満たない初心者。

それに比べ、私は操縦時間300時間を超える国家代表候補生。

そうですね！結局、力がないとダメなんですわ！

これを聞いて、なにか言い返すことができまして!？」

セシリアは言い返すことはできなかったが負けじと、自分の意見を

大声で発する。

「力、ね……。たしかに俺……。僕には力がないよ」

これを聞いて満足そうな表情を浮かべるセシリア。

「どうやら、この口論に勝ったという満足感が、あふれ出ているらしい。」

しかし、一夏は続けた……。

「誰かを守るための力はね……。」

「一夏!！」

刹那、教室が妙な雰囲気につつまれた。

そして、生徒たちは声の発信源に目を向ける。

そこには……。

「もう、あのことは……。」

悲しそうで、今でも泣き出してしまうような表情の美麗がいた。

「……ごめん、美麗」

「夏はわれに返ったように、殺気を抑えた。」

「おっと、ほったらかしにして悪かったね、オルコット」

「夏はなにも気にしてないような口調で話し出す。」

「一つ提案があるんだけど、いいかな？」

「な、なんですか？」

「僕も、クラス代表には力……いや、実力がトップの人がなったほうがいいと思う。」

「そこでさ、一つ『決闘』をしてみない？」

「決闘、ですか？」

「それで、この決闘の勝者がクラス代表ってことでいいんじゃない？」

「……わかりましたわ。その話、乗って差し上げましょう」

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日の放課後、第三アリーナで行う。」



織斑、とオルコットは用意をしておくように。それでは授業を始める」

どうも気まずい雰囲気が漂っていた教室のムードを変えるように、千冬姉が話をまとめる。

生徒たちは緊張の糸が切れたようにため息をつく、普段と変わらぬ感じで、授業を受けていた。

美麗以外は……。

俺のサード幼馴染がこんなにヤンデレなわけがない！(前書き)

俺のサード幼馴染がこんなにヤンデレなわけがない！

さっきのことは忘れたかのような雰囲気で一夏は食堂へと向かっていた。

もちろん美麗も一緒だ。

さきほどまで、少し落ち込んでいた美麗も今は気にしていないような表情をしている。

「一夏、今日はなに食べる？」

「僕？うーん、焼き魚定食かな。美麗は？」

「じゃあ、私も一夏と一緒にいいや」

なの変哲もない会話。

しかし、この会話は一夏にとって、美麗にとっても、至福の間である。

特に一夏はストレスがたまりやすく、さっきのセシリアとの口論でストレスがかなりたまっているため、このような会話は一夏にとって必須となっている。

ちなみにだが、この時の一夏と美麗はなぜかいい雰囲気になってお

り、  
とても話しかけられなかったらしい。(相川さん談)

「一夏……………」

「うん、気づいてる……………」

一夏と美麗は箸を止めて、苦笑いしていた。  
なぜ、二人がこんな表情になっているかというところ……………」

「ジ……………」

とてつもなく視線を感じているからである。  
まるで脅すような、怒っているような視線が二人、主に一夏に向けられている。

そして、その視線の正体がわかっていいるからこそ、一夏は冷や汗を垂らしていた。

「あの………簪？」

一夏はまるで意を決したかのように、視線を向けている人物。

サード幼馴染である更識簪の名前を呼んだ。

「一夏………」

すつと簪は現れた。

その表情は笑顔ではあるものの、目が笑っていない。  
いわゆるブリザードスマイルというものだった。  
そしてなぜか、後ろに阿修羅像が見えている。

一夏はというと、苦笑いをしたまま、すごい引きつった表情を浮か

ぶ

なるべく優しい声で簪に話しかけた。

「えっと、簪？なぜそんな怖い笑顔を浮かべているのでしょうか？  
それと後ろの阿修羅像はなんですか？。」

そしてなんで僕にあんな視線を向けていたのですか？。」

なぜか敬語の一夏に簪は笑顔のまま近づぐ。

「一夏、久しぶりだね」

「あ、ああ。久しぶり」

「それでね、いきなりなんだけど……………」

「お、おう……………」

このときの一夏には嫌な予感しかなかった。  
そして簪に謝る自分の未来が見えたという。

「なんで最初に私に会いに来てくれなかったの？」

「……………すみません」

「ずっと待ってたんだよ。やっとで一夏に会えるって、ずっと待ってたんだよ。」

「ただ一夏全然会いに来てくれないし。」

「しかも聞いた話だと、同居者は美麗とお姉ちゃんだったって？」

「う、うん。まあ……………」

今度は美麗が少し気まずそうな顔で答えた。

「ねえ一夏……。同じ幼馴染なのにこの扱いの差はひどくない？」

「言い返す言葉がございません……」

「それでね、一夏。私、4組だったんだけど明日から1組にしてもらうんだ。」

部屋も、一夏たちと一緒にしてもらったんだよ

「ちょっと待て！そんなことできたのか!？」

「千冬さんに頼んだらすぐに了承してくれたよ」

「さいですか……」

「一夏……。一夏は私と一緒にじゃ嫌？」

「嫌じゃない！むしろ嬉しい!！」

「そう？よかった」

簪はほっとしたような息を漏らした。

しかし、表情はブリザードスマイルのままである。

「じゃ、じゃあもうすぐ時間だし俺たちはこれで……」

一夏は逃げるように立ち去ろうとした。

「待って」

しかし、むなしくも簪に手を握られ逃亡は失敗してしまった。

「本当にごめん、簪。昨日はちょっと大変だったんだよ。なんでもしてやるから、な？」

必死で説得する一夏。

「な、なんでもしてくれるの？」

「お、おう」

なぜか簪は顔が赤い。

一夏はそんな簪を少し不思議そうな目で見ている。

「じゃ、じゃあ目を閉じて」

「ん、わかった」

一夏は言われたとおり目を閉じる。

このとき美麗、正確に言うところの場にいるすべての生徒は簪が何を  
するかわかっていた。  
そのため、複雑な表情を浮かべているものや、赤面して俯いている  
ものもいた。



「簪、いつたいなにを……んんっ！」

一夏の声は途中で遮られた。

そして一夏の唇には簪の唇が重ねられていた。

「んんっ……はぁ」

簪は自分の唇を一夏の唇から離し、真っ赤な顔のまま……。

「これで許してあげる……」

といいながら去っていった。

このあと、一夏はしばらくの間動けなかったらしい。

そして、嫉妬した美麗の蹴りによって現実に帰還した。

俺のサード幼馴染がこんなにヤンデレなわけがない！（後書き）

もうグッダグダですね……。

簪を少しヤンデレにして登場させようと思ったらこの様ですよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2698u/>

---

力を求めし者

2011年10月9日12時34分発行